

私は、2005年の暮れにふとしたきっかけでクロマチック・ハーモニカのことを知った。ハーモニカでクラシック音楽が自在に吹けること、多くの奏者がクラシック部門で活躍していることに驚いた。中でもオーストリア在住のフランツ・クメルさんの音色に惚れ、彼からCDを直接買い求めた。サラサーテ、パガニーニなどの困難な曲でも、一音一音が明瞭で聴き心地よく、毎日のようにこのCDを聴いていた。

バイオリンを断念してから30年近く音楽から遠ざかっていた私は、この小さな楽器に喜びを見出し、毎日5時間程吹き鳴らした。そして、どうしてもフランツさんの微妙なビブラートの音色を習いたかった。初心者で、富も才能もなく、すでに60歳を過ぎた私などにまさかと思っただが、学費などは心配するな。上手になってくれたら、それが自分に取って最高の褒美だ」と言ってくれてくれることになった。信じられない好意だった。

彼は自分のウェブサイトでハーモニカの直し方、楽器の推薦などを損得なしに率直に述べていた。そのウェブサイトで、さらに彼の書いたエッセイのコピーも載せていた。ハーモニカがクラシック音楽の一流の楽器として社会に認められるには、音質の大切さ、ビブラートの掛け方など相応の訓練の必要があることを強調した記事だった。手の動きで作るビブラート奏者が大半であるハーモニカの社会で大胆な発言のように感じ、反発を食らったのではなかったか聞いてみた。本音を話したただけだ。反感を買ってもしようがない。数人でも解ってくれたら、それで良いのだ。」と。そうだ、私もそのエッセイに感銘した一人であった。

このエッセイはあくまでクラシック音楽奏者を対象に書いたものであったが、ジャズ、ブルースが主のアメリカの奏者間からも、反感を買ったようだった。またあるとき、知人のアメリカのベテランジャズ奏者が私に言った。アメリカのハーモニカ祭で、フランスに握手をしようと思っただけと通り抜けてしまった。なんと傲慢な人だと思った。」と。このこともフランスに聞いてみた。自分は生来恥ずかしがり屋、知らない人と会話が怖くてできない。また臆病で、舞台上立つのが怖かった。」ましてや苦手な英語で話をするなどは、苦痛であったろう。友好的な米国人には、名の知れた奏者がこれほど内向的なことなど考えもしなかっただろう。傲慢な人とは程遠いのに、招いた誤解は大きかった。

大きな舞台での演奏より、知人の集まりで吹くのが一番嬉しいと言っていた。そして、大きな演奏会には大抵自分のピアノリストのジムを同行したそうだった。長年の付き合いの伴奏者で、演奏し易いと同時に舞台の恐怖感を和らげる役をしてくれたのかも知れない。彼の住むサンクトパルテンは、兵庫県の倉敷市と、姉妹都市である。1997年に、文化交流団の一員として、倉敷市でハーモニカを演奏したことがあった。その時もジムを同行した。大変楽しい旅行だったと聞いた。余談だが、お土産に何が欲しいかと市長に聞かれ、マンホールの蓋と言ったそうだった。帰国した後、3枚もの鉄の蓋が届けられてびっくりしたそうだが、一枚は、大きなオーケラの切り株の上に座椅子とし、二枚は、庭の踏み石として、今でも大切に使っている。

サンクトパルテンは文化都市で種々の画展や音楽会の催しがあり、何度も同行させてもらった。国際バイオリン学生コンテストなどもあった。客席で、フランスはいつもすべての演奏者に1.5倍大きな拍手を最後まで惜しまず続けた。演奏者への敬意と励ましと心の優しさが拍手に感じられた。彼はまたユーモアの好きな人で、話題が豊富でお互いに他国語の英語で話したにも関わらず、会話が途切れて困った覚えが一度もない。楽しい人であった。

初め、ビブラート奏法を教わる積りで生徒にして貰ったのだが、結局ハーモニカの直し法を含め、あらゆる面で指導を受けた。十年来、3回の訪問で計6ヶ月彼ら夫婦の近くに滞在し、週に

3度程のレッスンを貰った。米国に帰宅後も、スカイプでのレッスンを貰った。だが彼はレッスンと呼ばずいつも会合と呼んだ。教えるときも、私は、この様にするが、」と遠慮がちに言った。私を見下りしたことがなかった。

彼はまた非常に真面目な人であった。二人の兄と「トリオ・ピッコロ」として活躍していた頃の話だ。イタリアのコンサートの前夜、兄達は飲みに出たが、自分は翌日の演奏が心配で外出な どできなかったそうだ。好きなバツハ、シューベルト、サラサーテ、パガニーニ等々の曲を吹くにも、各々の作曲家の意図に従って吹く必要があると言い、ごまかすことのできない人であった。簡単な評価を期待し私が練習録音を送ると、一面に注意書きのついた譜面が送られて来た。難しかったら百回でも千回でも繰り返せと忠告をくれた。忙しい人だろうにと、その親切さが嬉しかった。

彼は、大きな音で自由自在に吹ける楽器を長い間夢見ていた。製造会社に当たったが相手にして貰えなかった。2004年頃、優秀な技術者で、会社経営者のノレさんという協力者ができ、思い切って新型ハーモニカNC64の製造に踏み切った。成功失敗を繰り返し、十年以上かけて作成した品だった。不運にも途中ノレさんが病で亡くなった。また、精密なコンピュータ制御のNC装置で作ったにも関わらず、さらに自分で二百時間もの手をかけてリードを削り調整する必要があった。そのうえ、彼自身の体調が年々悪くなって来ていた。結局三本だけ完成できたと思う。プロ奏者を対象に作ったものの、彼が一本、ドイツ人の愛弟子と私とで一本ずつ買い取ってしまった。売り物はもうないと思う。

NC64は、スーパー64と比較すると大きく重い。リードの長さも異なる。すべてが精密で、プレートは沢山のネジでびったり押さえられ、スライダーにも隙がなく空気もれの心配がない。上質なステンレス・スチールのリードは、しなやかで大きな音も出せる。暖めなくても、バルブがプレートにくっつく恐れもない。私に取って、一番ありがたいのは、手入れが簡単なことである。2、3週間に一度、丸ごと石鹸温水中に浸けて洗うだけで十分だ。

ところが一年目頃、スライダーがギンギンするようになった。よく見ると、スライダーが曲がっている。ボタンの押し方が悪いのかと案じて聞いた。彼は答えた。Tミリの厚みのあるスライダーだ。そんなに簡単に曲がる筈がない。」と。そして、郵便で、新しいのと取り替えてくれた。一年程して、またスライダーが同様な状態になった。不思議だ。落とさない限り、曲がることなど考えられない。」と彼は言った。ああ、考えてみたら、3回程、脇の下から落としたことを思い出した。体温で暖める必要も無いのに、スーパー64の習慣でつい脇の下で暖めていた。重いので、落としたのかもしれない。自分の不注意が悔しく、恥ずかしかった。だが彼は、私の間違いを叱ったり、愚痴を言ったりせず、送って来たなら、直してやるよ。」とまで言ってくれた。だが病中の彼に迷惑をかけたくなかった。落としたショックでリードにも少しづれが出ているのが解った。直しを教えてもらっていたお陰で、根気よく自分で直して、今は、殆どまたスムーズに使える様になった。

彼は普通の家に住み、普通の車を一台持ち、贅沢な生活をしている様子はなかった。だが、ハーモニカ奏者から金を儲ける積もりはないと言っていた。オーストリアで音楽のCDを作成、販売するには、厳しい検査と許可が必要で、随分お金がかかるそうだ。海外への郵送料をいれると、恐らく儲けなどはなかったに違いない。そして、買って呉れた人には、いつも丁寧な感謝状を同封して送っていた。後輩奏者を理解し、励まし、ハーモニカを惜しげなく困った人に送ったりしたこともあったようだ。私にも部品など、よく送ってくれた。月謝も、友達から取れると思うか。」と言って一度も要求しなかった。私がNC64を買いたいと言ったとき、高値になって申し訳ない。」と恐縮していたが、投資、上質な材料、種々の経費を考慮すると、儲けなどは殆どなかったに違いない。好きなハーモニカがいつの日か正式の楽器として世に認められることを願って努力を続け、人生を捧げたような大人物だったと私は思っている。

また、彼が、ハーモニカに専念できたのには、奥さんの強い支えがあった。一度離婚し間もなく再婚したが、二十数年間、ハーモニカから遠ざかっていた。四十歳代にまたハーモニカ生活に戻れたのも、奥さんの熱心な勧めと協力があった。鉄道会社での仕事とハーモニカだけで明け暮れた毎日、滅多に旅行などできなかったと奥さんは苦笑した。彼が昨年亡くなる数ヶ月前に、録音して持っていたすべての曲をユーチューブに載せたのも、奥さんの立っての勧めであった。そうだ。

私がオーストリアに滞在中の2013年の夏、私の娘が立ち寄った。夫婦は、近くの山に案内してくれた。スキー用のリフトが中腹迄運んでくれるが、後は歩いて登らなければならぬ。その頃すでに体調の悪かったフラッツであったが、苦情をこぼさず立ち止まり立ち止まりしながらもつきあってくれた。頂上で、ぞうだ、あんたの住むところの山よりずっと高いだろう？」と明るく笑った。自分のことを自慢したことは一度もなかったが、郷里のことは自慢し愛していた。

フラッツは、二〇一六年八月十八日に七十六歳の若さで障害を終えた」。その愛する郷里の静かな公園の一角に埋葬された。今年、雪の多い冬だったそうだ。美しい芸術を愛した彼のことだ。きっと自然の美しさをも満喫していることだろう。 2017年2月4日



埋葬地